

2021 年度  
新潟薬科大学外部評価報告書

2022 年 3 月

新潟薬科大学外部評価委員会

## 外部評価委員会委員名簿

(区分内、五十音順)

氏名	所属及び職名
◎ 濱口 哲	元新潟大学理事（企画・評価担当）・副学長
門脇 基二	新潟工科大学理事・副学長
吉田 真	高崎健康福祉大学薬学部・教授

◎：委員長

## 外部評価実施のプロセス

2022年1月31日 ～2月14日	各委員は「2021年度新潟薬科大学自己点検・評価報告書」及び自己点検・評価根拠資料を基に書面にて評価を行い、評価・意見及び提言等を委員長へ提出。また、点検・評価項目毎に評定を付して評価を行う。
2022年2月15日 ～2月24日	各委員から提出された評価・意見・提言等に基づき、委員長は「外部評価報告書（原案）」を作成。
2022年2月25日 ～2月28日	各委員は「外部評価報告書（原案）」を確認し、意見を委員長へ提出。
2022年3月3日	委員長は「外部評価報告書」を確定し、新潟薬科大学大学評価室へ提出。
2022年3月9日	大学評価室から学長に提出

## 総合評価の基準

2021年度の総合評価は、以下のSからCの4段階評定とした

S	基準を満たし、さらに特筆すべき取組みを行っている。独自性がある。
A	基準を満たしている。
B	概ね基準を満たしているが、改善の余地がある。
C	基準を満たしていない。

## 総 評

この3年間の外部評価を通じて、着実な改善を見ることができているのは素晴らしいことである。教職員の方々のご努力、さらに、評価・改善を組織的に進められている運営会議、大学評価室を中心にした取組に敬意を表したい。本年を含めた3年間の評価結果を一覧表で示したが、歴然とした改善が認められる。

	2021年度								2020年度	2019年度		
	総合評価	内訳							総合評価	総合評価		
1. 理念・目的	A		1-1	1-2	1-3				A	A		
		外部評価委員Ⅰ	B	A	A							
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A							
		外部評価委員Ⅲ	A	A	A							
2. 内部質保証	A		2-1	2-2	2-3	2-4	2-5			A	B	
		外部評価委員Ⅰ	A	A	A	A	A					
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A	A	A					
		外部評価委員Ⅲ	A	A	A	A	A					
3. 教育研究組織	A <sup>-</sup>		3-1	3-2					B	B		
		外部評価委員Ⅰ	A	A								
		外部評価委員Ⅱ	B	A								
		外部評価委員Ⅲ	B	A								
4. 教育課程・学習成果	A		4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	4-6	4-7	A	B	
		外部評価委員Ⅰ	B	A	A	A	B	B	A			
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A	A	A	A	A			
		外部評価委員Ⅲ	A	A	A	A	A	A	B			
5. 学生の受け入れ	A <sup>-</sup>		5-1	5-2	5-3	5-4				B	B	
		外部評価委員Ⅰ	A	B	B	A						
		外部評価委員Ⅱ	A	A	B	B						
		外部評価委員Ⅲ	A	A	B	A						
6. 教員・教員組織	A		6-1	6-2	6-3	6-4	6-5			A	B	
		外部評価委員Ⅰ	A	A	A	A	A					
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A	A	A					
		外部評価委員Ⅲ	A	B	A	A	A					
7. 学生支援	A <sup>+</sup>		7-1	7-2	7-3					A	B	
		外部評価委員Ⅰ	A	A	A							
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A							
		外部評価委員Ⅲ	S	S	A							
8. 教育研究等環境	A		8-1	8-2	8-3	8-4	8-5	8-6			A	B
		外部評価委員Ⅰ	A	A	A	A	A	A				
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A	A	A	A				
		外部評価委員Ⅲ	A	A	A	A	A	A				
9. 社会連携・社会貢献	A		9-1	9-2	9-3					A	A	
		外部評価委員Ⅰ	A	B	A							
		外部評価委員Ⅱ	A	S	A							
		外部評価委員Ⅲ	A	A	A							
10-1. 大学運営	A <sup>+</sup>		10-1-1	10-1-2	10-1-3	10-1-4	10-1-5	10-1-6			A	A
		外部評価委員Ⅰ	S	A	A	A	A	A				
		外部評価委員Ⅱ	A	A	A	A	A	A				
		外部評価委員Ⅲ	S	A	A	A	A	A				
10-2. 財務	A		10-2-1	10-2-2					B	B		
		外部評価委員Ⅰ	A	A								
		外部評価委員Ⅱ	A	A								
		外部評価委員Ⅲ	A	A								

2021年の総合評価は、S、A、B、C の4段階で評価(上位の評価に近い場合は「+」、下位の評価に近い場合「-」を付した)。

従来から高評価だった 7. 学生支援、9. 社会連携・社会貢献については今回も高く評価された。

学生支援については、学生支援総合センターを核としてアドバイザー制を活用したきめ細かい学生支援体制が整備されてきており、その活動を実質化する

ためのきめ細かい内容の「アドバイザーの手引き」が全教員に配布されるなど、体制整備が進んでいることが見て取れた。自己点検・評価報告書からは、体制整備の具体的成果を十分に読み取ることは出来なかったが、今後に十分期待が持てる。

社会貢献・社会連携については、信越地域唯一の薬剤師養成大学としての貢献は重要であるが、さらに、大学が立地する地域との連携の充実は、社会貢献の観点のみならず、学生教育にも重要な意味がある。ただ、今年の評価書は従来からの取り組みに依拠する記述が多く、本年度としての成果が不明確なきらいがあった。コロナ禍の中、さまざまな困難があったことは推察できるが、今後の新潟薬科大学のあり方を踏まえて地域連携の重要性を思う時、従来の実績に加えて、さらなる展開と具体的成果を上げていくことの重要性を指摘しておきたい。

今回、複数の委員が 10-1. 大学運営に高評価を与えた。これは、「新潟薬科大学ガバナンスコード」が 2021 年 2 月に制定・公表されたことに対する評価と今後への期待である。今後、新潟薬科大学がこのコードを手がかりにさらなる機能強化を図っていくことが期待される。

2. 内部質保証、4. 教育課程・学習成果について、3 年間を通じて、一定の改善が認められている。自己点検・評価を軸として PDCA サイクルを稼働させる仕組みの整備が真摯に進められてきたことは重要な進歩である。各教育課程で、「カリキュラムマップの整備」、「学年到達度試験」、「PROG テスト」、「ルーブリックの導入」などの学生の学習成果測定の諸試み、その結果を教育課程の改善や卒業生の質保証に生かそうとする取組など、3 ポリシーに基づいて教育課程の機能を実質化するしくみの整備が進められたことは評価に値するものである。

また、関連して、6. 教員・教員組織で記述されている、FD 活動の一環としてティーチングポートフォリオの作成が進められ、それを全教職員が閲覧可能になったことは重要な取組と評価したい。その内容にはまだまだ改善の余地があると思われるが、教育課程がその人材育成目標を達成するためには教員間の共通意志形成が不可欠で、そのために有効な道具立ての整備が始まったことは重要であり、今後に期待できる。

ただ、全体として、現在はさまざまな“道具立て”が導入された段階と言わざるを得ない。それら諸道具が、“形式的に導入された制度”の域を超えて実質的に機能し、学生の学習成果の向上にどれほど貢献するかは、今後の取組を待つしかない。この 3 年間でその基盤が整備されたことを前向きなものとして、今後への期待を込めて評価しておきたい。

学生の受入れ、そしてそれを反映した、教育研究組織については一定の改善が認められるものの、他項目と比べると低めの評価になった。いろいろな試行錯誤、努力が傾けられてきたものの、定員未充足の問題については改善の兆しが認められない。これは、厳しく言えば、新潟薬科大学の教育組織の現状が社会の人材育成ニーズに必ずしも適合していないことを意味しており、今後の財務状況へ

の影響も含め、重要な課題と言わざるを得ない。

新潟薬科大学は、「実学一体」を建学の精神として、「信頼されるプロ」を育成することを掲げている。ただ、薬剤師（薬学部）という明確な専門職業人養成学部における「プロ」と、もう少し幅の広い「生命科学を応用して社会の課題解決に貢献する人材」（応用生命科学部）という「プロ」とはおのずからニュアンスは異なる。薬学部については卒業生の薬剤師国家試験合格率が必ずしもはかばかしくない状況があり、応用生命科学部については養成する人材像が抽象的で、どのように社会に受け入れられていくプロフェッショナル育成を目指すのかが必ずしも明確でない。結果、両学部とも定員未充足を脱しきれておらず、現時点では改善への明るい展望は見えていない。この点について、関係者の真摯な努力が払われてきたことは理解できるが、その成果が現れていないのが現状である。

その観点で、今般、両学部の学生定員を見直し、看護学部、医療技術学部の2つの専門職業人養成学部新設計画が定まったことは、大学として一つの大きな決断である。組織改組の成果を見るには、10年単位の時間が必要になると思われるが、学部新設後の状況を注意深く見ていきたいと思う。

大学という高等教育機関のあり方は、新潟薬科大学創立の1977年頃から今日までの半世紀近くの間に変化を遂げ、現在、我が国の大学はその変化に戸惑いながら、諸改革に取り組んでいる。新潟薬科大学が変化に対応した諸制度の整備を進められてきたことは、大変心強いことであるが、整備を成果に結びつけるためには、それら諸制度を機能させる努力が必要になる。今後、制度整備が育成する人材の質などの具体的な成果に結びつくことを心から期待する。

2022年3月

新潟薬科大学外部評価委員会

委員長 濱口 哲